ダイナミックな村芝居の演出
ー農村歌舞伎を支えた「回り舞台」ー

■各地に残る農村舞台

芝居小屋の回り舞台は、江戸時代から農村歌舞伎（村芝居）に使われてきた。1970（昭和45）年当時、廃絶された舞台を含めて約1,800棟が確認されていた。現存しているのは1,000棟未満と推定される。

明治時代後期からは地方巡業の歌舞伎をはじめ、壮士芝居、新派、浪曲、講談、漫才など様々なものが演じられ、遊び場、社交場として重要な役割を果たしてきた。

中部地方には移築されたものや、大規模な解体修理されて復活した回り舞台が多く残り地域の活性化に役立っている。各務原市の村国座は本格的な回り舞台と広い花道、奈落を備えた江戸時代末期から明治時代初期の劇場建築の代表例である。他に大阪池田市から明治村に移築された呉服座も本格的な回り舞台を備えている。香川県琴平町の旧金毘羅（こんぴら）大芝居（金丸座）は、現在もなお毎年プロの歌舞伎役者による本格的な歌舞伎興行がおこなわれている。

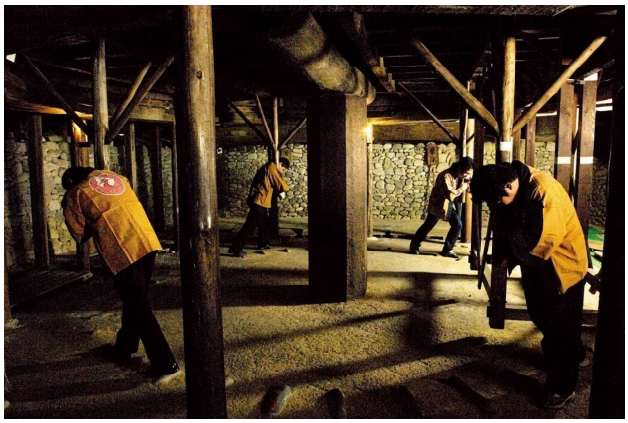
金丸座・こんぴら歌舞伎大芝居　2010年2月 石田撮影

村国座の回り舞台　出典：岐阜県各務原市ホームページ

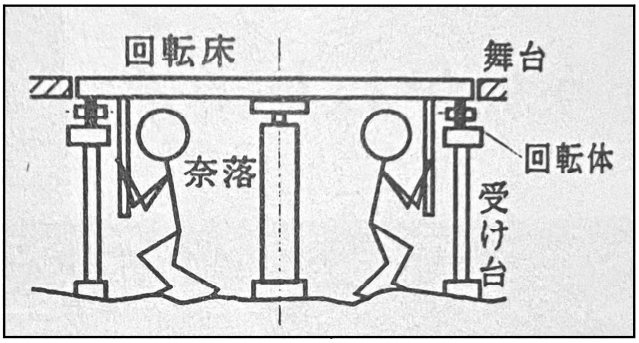
■回り舞台の構造

回り舞台は、場面を瞬時に転換して演出効果を高める。初期の回り舞台は平舞台の上にもう一つ台を置いて回す上回し式であった。後に平舞台を丸く切り込んで同じ平面で回す構造の舞台が主流となる。回転床の中心に心棒を固定し、床部分だけを回転させる「皿回し式」である。

金丸座の回り舞台は、直径4間5寸（7.54メートル）あり、操作は舞台下の奈落で、盆の下側に取り付けられた4本の担ぎ棒を人力で押して舞台を回転させる。演者や道具類が載った重量のある舞台をスムーズに回転させるため、近代の旋回座軸受に相当する木製の軌道、保持器に支持された木製の車輪で支えられている。



奈落の底で舞台を人力回転　出典：金丸座ホームページ



回り舞台の構造　出典：坪井珍彦『トライボロジーの技術史余話』

2013（平成25）年開場した第五期歌舞伎座は、最新式の直径60尺（18.18メートル）、電動式の回り舞台を備えている。

（荒井　肇）